

神社史料の諸問題

諏訪神社関係史料を中心に

井原今朝男

Problems with Historical Shrine Documents Focusing on Suwa Shrine

IHARA Kesaō

はじめに

① 諏訪神社史料群の構造

② 廃仏毀釈・神仏分離による神宮寺関係史料の流失と近代の諏訪縁起創出
終章 諏訪神社史料の特徴と他社との共通点
むすびに

【論文要旨】

近年、神社史研究が活発化しつつあるが、その分析対象となる多くの神社史料がもつ歴史的特徴や問題点について留意されることが少ない。そこで神社史料についての資料学的検討を行った。第一は、現存する神社や現任の神官層の保管下にある神社史料群はむしろ限定された文書群にすぎず、むしろ多くの関係史料群が社家文書として個人所蔵に帰しており散逸の危機に直面し、史料群の全体像はなお不明の状態のものが多いといわなければならない。社家文書の群としての全体的構造を理解することとは、神社史料に対する史料批判を厳密にするうえで必要不可欠な作業である。第二に、個別神社史料群は、明治の廃仏毀釈によって仏事関係史料群が流出し、史料群の構成は大改変を受けている。そのため、現存史料群から描く神社史像は歴史実態から乖離してしまうという問題に直面することになる。改めて、廃仏毀釈の実態解明や旧

聖教類の所在についての史料調査が重要な課題になっている。第三は、現存する神社史料群は、とくに近世・近代の神官層による神道書や縁起の編纂・改変という諸問題を抱えている。しかし、それらの解明は今後の課題であり、史料学的な問題点として論じられていない。神道史というものが近世国学や近代国家神道によって、「近代日本的な偏見」を受けていることが指摘されてきた。近世・近代の国家神道の下で神道書や神社史料がどのようなイデオロギー的変容を遂げたのかをあきらかにすることは、神社史料研究の一研究分野としなければならない。こうした神社史料ももつ諸問題や特質をトータルとして論じる多面的な資料学的研究が必要になっている。

はじめに

かつて戦前まで国家神道の影響下で行われてきた神道及び神社史研究は、戦後の空白期を経て、九〇年代から大きな変化が起こってきた。岡田莊司・藤本元啓に代表される神道学における儀礼研究の進展⁽¹⁾、井上寛司に代表される諸国一宮制研究や神社史研究⁽²⁾、さらには國學院大學におけるCOE国学研究、国文学分野での中世日本紀や縁起研究、歴博での平田篤胤研究など⁽³⁾によって神道史研究や神社に関する研究状況は大きく変化しつつある。

その主な特徴は、第一に神社史や神道史研究がかつてのような政治的イデオロギー研究の立場を脱して、史料に即した実証的研究が蓄積されるようになったこと。第二に、中世の神社縁起や神祇秩序は、古代の記紀神話や律令的神祇秩序とは相対的にも時代的にも区別された中世特有のものがつくられており、その連続性と独自性の解明が研究課題として提起されるようになったこと。第三に、伊勢神宮・石清水八幡宮・賀茂社など二十二社や権門神社のほか、諸国一宮や惣社など国レベルの神社、郡鎮守や荘園鎮守などの郡・荘レベルの神社、さらには郷や村の神社など階層的な神社の機能と役割を地域社会や仏教・寺院との関係で解明しようとする研究が進展している。このような神社史研究の進展は、自治体史編纂による地方神社史料の発見・史料目録・公開などによるところが大きい。

しかしながら、こうした神社史研究を一層進展させる上で留意すべきこととして、今日の神社に伝来する神社史料は、武家文書・公家文書や寺院文書とはきわめて異なる特質があり、それに留意しなければならぬことが多いように思う。私は諏訪神社史料について、一九八〇～九二年まで長野県史編纂や一九八八～九五年までの諏訪市史編纂、一九九四

～二〇〇五年の一宮制研究を通じてほぼ二十余年にわたり調査に従事してきた。そこで、神社に伝来する史料群がきわめて特殊な残り方をしていことに気づいた。これまで部分的な事例報告は、歴博共同研究や國學院COEプロジェクトなどで行ってきた。そこで本稿では、諏訪神社史料を中心に、第一に、神社史料が今や神社と無関係になった旧社家文書として散在しており、散逸や未調査のままに放置されている危険性が高いこと、第二に、廃仏毀釈や国家神道や近代寺社縁起の編纂などで資料の変容が大きく、史料批判学の深化を図る必要が高いこと、第三に中世神社関係史料にも特定な社会集団やグループによる意図的な資料操作や編纂活動を経た資料群が伝来していること、などの特徴について検討し、社家文書の特質に迫ろうとしたものである。こうした諏訪神社関係史料の特徴を、近年行われた、祇園社・北野社など権門神社や香取・鹿島など諸国一宮の神社史料研究などの成果を比較してみると、類似点が多いことが指摘できる。もとより、これらの諸点は仮説の域をでるものではなく、実証性を高める努力が必要である。今後の神社史料研究の前進のために一つの問題提起としてご批判をえられたい。

① 諏訪神社史料群の構造

現在、諏訪大社では下社秋宮境内の宝物館と上社境内の宝物館に所蔵資料を保管し一部観覧に供している。そのため、諏訪神社史料は諏訪大社所蔵の資料がその骨格だと考えられやすいがそれは大きな誤解である。

I 諏訪神社所蔵史料群

現在諏訪大社の宝物館が所蔵しているのは諏訪大社下社文書と上社文書であるが、それらは、諏訪神社関係史料の全体像からみれば、ほんの

一部にすぎない。両者のうち、下社文書が文治年間のものから戦国・江戸初期までのものが数多く存在する。

① 諏訪大社下社所蔵文書

前右大將家政所下文・鎌倉幕府下知状案・左馬寮下文案・鎌倉幕府裁許状案・鎌倉幕府下知状案（下社大祝時澄）、小笠原長基寄進状（諏訪大祝）・信濃十九牧大使幸舜下文案・小笠原政経免状（諏訪大祝）・小笠原長秀安堵状（同）・小笠原政康安堵状（同）・小笠原持長安堵状案（同）・天正二年二月武田勝頼造営手形・武田勝頼朱印状（三澤平太）・天正六年年上諏訪造営帳・寛永三年下諏訪御神領高物成割帳など比較的多くの古文書や記録類を所蔵している。近世大名諏訪家の史料（安芸守頼忠・因幡守頼水）が混入している。

② 諏訪大社上社所蔵文書

大宮御造営之目録案（嘉暦四年）・諏訪頼満注進状案（御渡嘉吉三年（永正十六年））などでその数は下社と比べても少数である。しかし、これらが中世以来、諏訪神社に伝来した史料といえるか否かについては疑問である。下社所蔵文書はいずれも下社の諏訪大祝に宛てられた権利文書であり、小笠原政経免状・小笠原長秀安堵状・小笠原政康安堵状・小笠原持長安堵状案などはあきらかに諏訪下社大祝金刺家に宛てられたものである。しかも、小笠原長秀安堵状は、原本である『市河文書』の小笠原長秀発給文書と比較して料紙が小さい。とりわけ花押は勢いがなく花押影と判断され、写とみるべきものと私は考えている。文明十五年（一四八三）諏訪上社大祝諏訪継満と矢崎政継・千野入道・神長官守矢満実らの内戦になったとき、下社大祝金刺興春は上社大祝諏訪継満方に味方して上桑原で戦闘になり、下社大祝以下三三騎・足白野臥一三人が戦死した。⁽⁵⁾ 両社の抗争は激化し、下社大祝金刺昌春は、永正十五年（一五一八）に上社大祝諏訪頼満に攻められ荻倉要害が自落して「家風断絶」となっている（信史⑩448）。その後、大永五年（一五二五）の「勝

山記」「妙法寺記」には「諏訪殿府中へ御入有」とあり、諏訪氏が甲府での屋敷を武田氏に所望したことがみえる（信史⑩520）。こうした中で、享祿元年（一五二八）武田信虎が諏訪郡に攻め入った（信史⑩540）。諏訪から武田信虎に援助を依頼した「諏訪殿」こそ、下社大祝金刺昌春とみてまちがいないだろう。この金刺昌春の線刻銘文と花押のある八稜鏡は下社資料として伝来（信史⑩41）し、その伊勢御師にあてた発給文書も諏訪教育会にあった（信史⑩64）。言い換えれば、下社大祝の金刺家が滅亡したがゆえに、その関係資料や古文書が諏訪下社に所蔵されて伝来することになったものと考えられる。諏訪下社文書に中世史料が多く残存しているのは、戦国期に廃絶した下社大祝金刺家の史料を諏訪神社が保存・継承し、その他の社家文書も獲得したものであるといえる。諏訪上社の場合には、大祝諏訪氏の子孫が存続し家文書として伝来したが故に、上社所蔵文書は下社所蔵文書と比較してきわめて少数である。この現象は、諏訪神社が所蔵している史料群は基本的に大祝や神官などの社家文書であったことを示している。

諏訪神社史料の中では、諏訪神社が所蔵するものは以上のごとくきわめて少数であり、例外的なものといわざるをえず、神社の外で所蔵される旧神官・社家文書こそがその中核に位置を占めるべきものである。つぎに旧神官所蔵史料群をみよう。

Ⅱ 旧神官所蔵史料群

下社大祝金刺家は中世で断絶したが、上社大祝諏訪家は近代まで存続した。大祝諏訪家は、諏訪市神宮寺と東京在住の当主のほかに庶家が存在した。旧大祝家は、現在、諏訪神社とは関係がなくなっているが、いづれも旧社家の個人史料として大量の史料群を所蔵している。

^{おほはかり} 大祝のほかに、^{ごんはかり} 五官祝といわれる神官が存在した。中世諏訪神社の発給文書は、大祝と^{ごんはかり} 権祝・^{ごんはかり} 擬祝・^{ごんはかり} 副祝・^{ごんはかり} 禰宜の四人の神官が連署する配符

と副状として神長官が奉じた御教書がセットで機能するものが正式のものであった。⁽⁶⁾この神長官と権祝・擬祝・副祝・禰宜の四人を五官祝と呼んでいる。⁽⁷⁾この五官祝のそれぞれの家に家蔵文書が伝来していたが、擬祝家と副祝家の二家についてはまったく不明である。その概要は以下のとおりである。

① 諏訪大祝家文書

諏訪頼宣所蔵の史料群であったが、現在は諏訪市立博物館に寄託管理されて目録作成中である。系図や新出の写本、無年号古文書などが含まれており、あきらかに権祝家矢島家の写本と思われるものが存在している。大祝家や五官祝が姻戚関係や養子関係をもっており、相互に家蔵史料の写本をつくり、相伝しあっていたことがあきらかであり、その全容の解明は今後の課題である。これまで知られている主要なものは諏訪頼宣家と忠弘家に分割伝来してきた。⁽⁸⁾

② 守矢真幸文書（神長官）

神長官守矢家文書は長野県宝に指定されたこともあって茅野市神長官守矢史料館と茅野市立総合博物館に寄託されている。宮地直一・寶月圭吾らによる『諏訪史』（前後編・信濃教育会諏訪部会一九三〇・一九三七）の中心的史料となったもので、目録も茅野市神長官守矢史料館によって作製され、全容が判明している。⁽⁹⁾戦後の諏訪神社研究も、守矢家文書を中心に展開された。⁽¹⁰⁾なお、守矢家文書には、中世の原本史料が含まれるものの、その多くが近世の写本である。その分類が詳細調査によっておこなわれておらず、『信濃史料』が「検討の余地あり」としたもののでも、『鎌倉遺文』は案文や写として再録しており、史料批判なしに学術論文の史料として利用されているものもみられる。原本調査を怠ったまま、学術論文が作製されるという危険な研究状況になっており、注意が必要である。

とりわけ、「系図」によれば、権祝家矢崎家との姻戚関係や養子関係

が確認され、その際に権祝家文書を書写・相伝したことが想定される。著名な嘉暦四年諏訪頭役結番帳案写は、唯一の写本として『信濃史料』に取られ広く活用されている。しかし、それは権祝家矢嶋本の近世写本であり、現存の権祝家本は守矢家本よりも善本であり、守矢家本の欠字のほとんどが復原可能である。再検討が必要である。こうした守矢家文書の特徴や問題点については、今後も深められなければならない課題である。⁽¹¹⁾

③ 矢島正昭文書（権祝）

権祝矢島家文書も、諏訪市立博物館に寄託され、目録作製中である。⁽¹²⁾市立博物館のご協力で部分的に調査させてもらったところによれば、嘉暦四年の諏訪頭役結番帳案写が矢島本にあり、『信濃史料』に採用された守矢本がこれまで欠字とした部分もかなり大幅に判明する。権祝矢島本が、むしろ守矢本の藍本にあたるもので、良質の写本である。

「諏訪大明神絵詞」は、大祝本・守矢本のほかに権祝本として二本があり、錯簡本のほかに、権祝本には錯簡本ではないものが伝来していること、そこに「南原下坊 権祝綱政」の奥書が存在することが判明した。⁽¹³⁾

これまでの通説では、宗詢が書写した文明四年本を諏訪社権祝矢島家が伝え、弘化二年矢島真賢本が守矢家を継承して守矢本になったものとされてきた。写本研究の到達点をつつた金井典美によれば、現在の写本はすべて宗詢が写した権祝家本系統のもので、権祝家正本は文明四年宗詢が書写したもののだが、この系統の写本には十一月と九月朔日神事との間に錯乱があること、梵舜本（東京国立博物館所蔵）は慶長六年の写本で十二巻本からの写本で重要であること、などの諸点をあきらかにしている。⁽¹⁴⁾

したがって、権祝本に錯簡本でないものが存在することは新しい知見であり、奥書に「南原下坊 権祝綱政」とあることは、権祝綱政が伊那

郡南原の文永寺下坊においての書写を示すものである。綱政を特定すれば、その書写年代も特定できることになる。権祝矢島家所蔵文書の中に「諏方上宮権祝系図」と題された系図がある。二十一代の「権祝政満」から記載が詳細になり、権祝政満―政綱―忠綱―忠政―綱政―廣政―正賢―正珉―正郷―正敏まで記載されており、この部分は信憑性が高いと考えられる。このうち、綱政についてはつぎのように記録する。

「傳左衛門ト号後ニ宮内ト改、実ハ三上久助之嫡子名於山石ト号母ハ高山小四郎ノ娘三歳ニテ引越五歳ニテ職分相続妻ハ養父忠政ノ弟満綱之娘、綱政行年六十三歳明暦三丁酉年正月晦日卒、三上久助ハ日根野織部正殿之給人忠政信友之故ヲ以養子トス三上氏ハ江州大津之人也、後ニ去テ諏方ヲ、本国大津ニ住ス養子ヲ長兵衛ト云其後佐渡ニ移リ彼地ニテ卒、天正年中日根野織部正高吉同織部正吉明高嶋之城居住慶長六ヨリ諏方氏再居住」^①

ここから、綱政が明暦三年（一六五七）に六十三歳で死去した事が判明し、文禄三年（一五九四）前後の生まれであることがわかる。日根野高吉・吉明に仕えたのであるから、江戸初期の人物である。したがって、権祝家本や神長官・大祝本など綱政書写本を最古のものとしてきた通説は再検討が必要であり、むしろ、文禄から明暦三年に活躍した権祝綱政が文永寺で書写したものであり、守矢家・大祝家本などの写本が成立するのも江戸中期以降のことである。守矢家本などには、国学者や神官層による編纂活動によって幕末・近代に入って史料が激増することになったものといえよう。したがって、慶長六年の梵舜本こそ、名実ともに最古の古写本にあたるとしなければならない。

④ 矢崎勝次郎文書（禰宜大夫）

主要な史料は、年未詳長坂虎房書状（11―498）・年未詳信玄書状（13―574）、天正二年武田勝頼書状（14―75）・天正九年武田勝頼書状（15―63）など戦国文書が多く、記録に天正六年禰宜大夫覚書（補遺上493）、

実物資料では、天正十二年六月十五日奉納剣（鉄鐔）がある。近世には小出貞栄が禰宜大夫としてみえ、また守矢氏も禰宜大夫になっている。

⑤ 擬祝

文政九年日記など近世文書を残す。寛文九年には小出貞辰が擬祝であったが、のち伊藤氏が勤めた。茅野市高部西沢川東側にあったが、現在は諏訪市内に移転した。中世文書はない。

⑥ 副祝

寛文七年に守矢從辰が副祝であった。諏訪市神宮寺長沢女澤川を昇ったところに屋敷をもつ。中世文書はみられない。

これら五官祝はいずれも現代の諏訪神社とは無関係な旧社家であり、④⑤⑥の調査はほとんど未調査に近い状態である。今後の諏訪神社の家文書については、大祝家文書と五官祝家文書との写本活動や姻戚・養子関係による史料の出納関係の解明が、不可欠な調査課題になっている。

Ⅲ 旧職人・社僧家旧蔵史料群

大祝・五官祝家のほかに、政所役の土橋家、宮大工の牛山・原家や諏訪神宮寺の社僧が個人に分散して家文書を伝来している。

① 土橋満磨文書

御頭役請執帳永禄九年（13―9）・永禄十一年（13―212）・十二年（13―297）・元亀元年（13―378）・元亀三年（13―437・458・496）など戦国期の古文書を残す。

② 原英富文書

諏訪社の宮大工職を継承した家で、江戸初期には、大工牛山家と小工原家があったが、牛山家の名跡を原家が継承して、戦国期の天正五年閏七月七日武田勝頼宛行状（14―212）・天正十二年六月初日御宝殿御輿棟札案写などの古文書や江戸時代の古文書を伝えている。近世建築の指図など関係史料を相伝しており、神社建築や諏訪神宮寺の寺院建築の指図

を知ることができる。

諏訪上社神宮寺の指図については、廃仏毀釈で破壊された諏訪上社神宮寺の指図として、喬木村歴史民俗資料館に伝来したものが市町村誌などで活用されている。しかし、原家所蔵の神宮寺建築指図と比較すると、きわめて異なる部分が多い。明治廃仏毀釈関係史料の史料批判のためにも、原家の近世建築指図の詳細調査が求められている。なお、現在では、原家も諏訪神社とは無関係になっている。ただ、七年一度の御柱祭では、御柱の冠落としての役は原家が勤めている。なぜ、自分の家が御柱の冠落としての役を勤めるのか不明であったが、宮大工の家柄によるものであることが判明してありがたいと語っておられたことが思い出される。

③ 諏訪上社神宮寺関係資料

明治廃仏毀釈以後に、上社神宮寺とその院家にあった仏像・聖教類・古文書などは、社僧の家文書として伝来したあと、還俗したため、諏訪郡内の関係寺院などに配分され、大町市・松本市・諏訪郡内・伊那郡内の諸寺院・個人に流出・諏訪教育会などに一部保管されるなど数奇な運命をたどった。旧院家の古文書や仏具類はいまでも市場に出回ることがつづいている。一例として、聖教類をもっていた小島家は東京に移転世代交代が進展して史料類は不明である。上社神宮寺の院家妙法院は、如法院文書（滝沢家）・永禄十年武田信玄朱印状（13―184）などをはじめ多くの写経類・聖教類・仏像群が伝来した。しかし、還俗して滝沢家として相伝した資料群も分散流出し市場に出ている。

④ 諏訪下社神宮寺関係史料

下諏訪町の宮坂美都子所蔵として、戦国文書の写が伝来する。主要なものでは、天文十一年武田信玄寄進状（11―183）・天文二十一年長坂虎房寄進状写（12―540）・永禄十年武田信玄朱印状案（13―185）・年末詳信玄書状（13―574）・天正五年武田勝頼判物案（14―190）・七月廿一日朱印状案・天正九年武田勝頼朱印状（15―7）・天正三年武田勝頼朱印状写

（14―489）・天正六年武田勝頼朱印状写（14―363）などである。諏訪下社神宮寺の三精寺を中心に社僧関係史料の写や聖経類も所蔵している。

IV 旧小社祝・神人史料群

九頭井神社の神主矢島家・武井神社の祝武居家や、千野・諏訪・河西家など造営銭の執（取）手衆や郷村の小社祝家で諏訪神社の諸舎造営請負担当の家に伝来した文書が存在する。

① 矢島斎文書（茅野市上原）（九頭井神社神主）

永禄九年武田信玄寄進状（13―44）などを所蔵。九頭井大夫などともえるが、九頭井神社の神主家であった。

② 武井斎治文書

天正六年五月廿七日武田勝頼朱印状案（14―270）・織田信長禁制（15―185）などを相伝する。前者は武居庄宛であり、武居祝の家柄と考えられる。

③ 千野俊次文書（諏訪市片羽・本町）

千野家は大祝家の申次を行う家柄であったことは、伊勢早雲書状などからあきらかであるが、その社家との関係は不明である。外記太夫を官途としている（⑩275・316）し、神使御頭の内県介を「恒例の如く」勤仕し、神使を千野眞子三男が勤めている（⑨519）。早くから武將化し、千野光成は信玄の諏訪頼継戦ではいち早く信玄方に属して戦功を挙げている。戦国期は、朝負尉を官途としている。主要な史料は、足利永寿王書状（宝徳元年）、伊勢宗瑞書状（⑩125）、天文十一年板垣信方安堵状案（11―192）・天文十二年武田晴信安堵状（11―207）・千野朝負尉目安案（11―232）・天文十七年武田晴信宛行状（11―368）・天文二十年長坂虎房書状（11―497）・弘治三年目安案（⑫173）・永禄九年武田信玄朱印状（13―2）、元亀二年武田朱印状（13―458）・天正六年武田勝頼造営手形など武田家との関係を示す戦国期の古文書原本が多い。

なお、千野鞆負尉と同名である千野出雲は、永禄九年年閏八月信玄から辰野之地一貫五百文を安堵されている(1344)。この一門に、千野兵庫文書(諏訪市本町)がある。天文十七年武田信兼書状(11409)・元亀四年武田信綱判物などを所蔵する。

④ 河西信三・河西五郎文書(諏訪市)

この河西氏も出自が不明である。天正四年武田勝頼朱印状(1359)、天正十一年諏訪頼忠朱印状(1696)、天正十四年諏訪頼忠朱印状(16)(鉄炮玉薬武具嗜之可奉公)などの戦国文書を所蔵する。この一門には神奈川県に移住した河西竜二家にも、永禄十三年武田信玄感状案(13364)、天正二年武田勝頼朱印状案(144)、天正十六年諏訪頼忠朱印状案(16549)などを所蔵している。ただ、河西但馬守虎満は、天正三年前後に春芳軒宗軒・子息小田切神七郎昌親・同跡部新八郎昌光による下社神宮寺千手堂建立の棟札に連署している(1492)。それゆえ諏訪社造営事業での取手衆の一員と考えられる。

以上が、これまでの調査で、中世の諏訪神社関係文書を所蔵している主要な家である。ここから諏訪神社史料の特徴としていえることは、古代・中世においては、諏訪神社本体が所蔵していた史料群はなきに等しいほどであり、大量の文書群が諏訪大祝家や神長官・権祝・擬祝・副祝・櫛宜太夫家の五官祝家やその他の社家文書として伝来していたことが挙げられる。その後、下社大祝金刺家の没落によってその関係史料群が大社下社に伝来し、明治維新・廃仏毀釈の後、一部は旧社家から流出する一方、徐々に諏訪神社に寄進・買戻されるものが現れた。近代の国家神道の下で諏訪神社の神職が旧社家関係者と無関係になったことによつて、現在では諏訪神社とは直接関係のなくなった旧社家文書として大半の史料群が個人所蔵になっている。一部は、博物館などに寄託されているが、他方では未調査のまま散逸の危機に直面しているのが実態であるといえる。

諏訪神社史料群の性格を考える場合には、とくに明治期の廃仏毀釈・神仏分離によつて大きな変革を受けていることに特別の留意が必要である。それなくしては、史料群の全体像を理解しえない。以下、その点について検討しよう。

② 廃仏毀釈・神仏分離による神宮寺関係史料の流失と近代の諏訪縁起創出

I 諏訪神社の神仏分離

これまで、諏訪神社の廃仏毀釈については、鷲尾順敬によつて経過がまとめられている。鷲尾の報告は、「右大正九年八月十一日、十二日、十三日諏訪に滞在し上社下社及び関係諸家を訪問して調査す」とある。鷲尾が依拠した史料は、庄屋笠原五右衛門日記「年内諸事日記覚書」、宮奉行伊藤主膳日記「御用日記」、⁽¹⁶⁾「諏訪大祝日記」があげられ、それらにより調査報告をまとめたものである。そこでは、「一、仏寺の由来、二、年中行事及び社僧の職務、三、仏寺及び仏教関係の建築物の破壊」の三項目について調査結果が叙述されている。特筆すべきことは、一年中最大の行事は、四月十四日如法経日々三時勤行で、如法院は大に勢力があったこと。上諏訪の松沢義章の平田国学、下社大祝金刺振古の国学振興(飛驒田中大秀、上野飯塚久敏の講義)、社人による国学研究、社僧の上位と社人との対立、神仏分離令に社人ら踊躍し、仏教関係の堂塔らを撤去せんとしたが、一藩の人民は進んでその事にあたらうとしないので社人が京都に上り訴えたこと、などに注目している。廃仏毀釈の経過はつぎのようにまとめている。

慶応四・六、一五 京都から政府監察官富澆夫、副使中川陸奥が高島藩下向

同 六、一九 神領人足の動員して、諏訪神社境内の仏教堂塔

(上) 社11箇所、下社3箇所)を取り壊し

六、二二 政府監察使の帰京

一二、一〇一九 村方にて上社普賢堂、薬師堂、釈迦堂、大般若堂、納経堂、如法院・護摩堂、仁王門、経堂、五重塔などの解体、売却、払下(入札)。

この鷲尾説に批判的な見解が、今井真樹によって展開されている。今井は、「史実の紙上保存」を目的にするとして「鷲尾順敬『明治維新神仏分離史料』中にまとめられた史料は本稿では可成取扱はぬ事にした」として、「上社十一箇所堂塔御取除キ材木(鉄物)取調帳(明治元年十二月)」「盛蓮寺文書」「検校太夫届出」「参籠所日記」などによって記録を残している。鷲尾が収集・依拠した史料とは異なる廃仏毀釈の史料を別に今井が収集していたのである。今井は、「二、各廢寺遺跡の來歴三、付屬寺院の神勅と寺社の衝突」について詳細に記述し、年末詳の「蓮池院訴訟について社家より御答の留書」(宝曆か)を根拠に、近世諏訪社内部で社家と僧侶の衝突が激しかったこと。元治元年十二月十七日下社千手堂火災をめぐる社坊と神宮寺僧との責任問題訴訟。元禄頃大欄宜桜井左内が吉川惟足と結んだこと、天保頃香川景樹の門人今井信吉が進出したこと、幕末に平田門人松沢義章や本居門人宮坂久寛、飯田武郷らが台頭して諏訪国学の基礎をきづいていたことを強調している。「四、明治維新当時除仏の実際」については、つぎのように記述し、鷲尾説との違いを強調している。

明治元年(一八六八)三、一二 神仏分離令。四、一〇 太政官神祇官通達。四、一六〇一七、高島御役所が社方・寺方に申し渡。六、二五 大鑑使の下向。六、一七 寺方より除仏の請書、還俗名届書。六、一九、高部、宮田、渡の人足に法被を着せ鉄塔、大般若堂、納経堂、薬師堂、釈迦堂、五重塔、如法院護摩堂取り壊し、普賢堂大あらし。六、二〇、使者下諏訪滞在、取り壊し延期、上下社ともに

売物による入札をまつ。六、二二、鑑察使帰京。八〇九月競争して破却に取り掛かる。九、四、堂塔取除分を神宮寺村への下け渡し申請。一一、三〇 真志野村へ普賢堂・五重塔取壊落札。一二、三〇 普賢堂取壊。

今井は、「五、除仏後始末」として、諏訪神社の廃仏毀釈の特徴をつぎの四点にまとめている。①村方人足の動員による強制的取壊し。②信濃一宮としての社格維持。③県内における最初の廃仏毀釈の「典型例」。④現在に至るまで、諏訪上社・下社には仏教的要素のあるものはすべて神社の外に出したとする。

この今井説と鷲尾説とを比較すると、鷲尾説は慶応四年六月の鑑察使の行動を中心にまとめ、仏塔舎の解体を一二月に略述するにすぎない。これに対して今井説は鑑察使帰京から一二月までの諏訪地方の村落内部の動向を中心に整理している。そのために、諏訪神社の廃仏毀釈の実態について、両説は基本的な史実の一致をみていない。その後、『諏訪市史 下巻』(諏訪市一九七六)・『茅野市史上中下』(茅野市一九八〇・八七)においても、諏訪神社の廃仏毀釈は概説されるのみで新規の史料発掘はなされていない。鷲尾説と今井説の矛盾についても注意がむけられていないことはまことに残念である。

II 廃仏毀釈・神仏分離の新史料と神宮寺の織豊期再建説

1. 廃仏毀釈に関する近代史料の発見

一九九六年、諏訪市仏法弘隆寺・岡谷市昌福寺の調査では、廃仏毀釈に関する近代史料を数点発見することができた。

表1

年次	史料名	差出人	宛先	所蔵者
① 慶応4	「岡社仏閣社僧寺院御廃一流談林所納所諸般記」			仏法寺

②慶応4・6	奉招請契証文	仏法紹隆寺	上社神宮寺宛	同
③慶応4・6	普賢菩薩像・文殊菩薩像支	上社神宮寺	仏法紹隆寺宛	同
④明治2・7	證 木蓮華・五具足等代金請取	神原役人	仏法寺御納所	同
⑤昭和14・5・2	狀 如法院旧蔵普賢像移管契約	安曇郡盛蓮寺	宛 仏法紹隆寺住職宛	同
⑥慶応4・9	神原圖書頼高付属狀 神宮	諏訪郡乙事法	不動明王小福	昌福寺
⑦明治9・9	寺 法隆寺法山観詳讓狀 観詳	昌福寺住職	像・不動明王画 不動明王尊	同

これらの新出史料のうち、②③によれば、慶応四年六月に諏訪上社神宮寺旧蔵の普賢菩薩・文殊菩薩立像二体が、仏法紹隆寺に移管されていたことが判明する。今井説を裏付ける史料といえよう。⑤によれば、上坊如法院旧蔵の普賢菩薩像が大町市盛蓮寺から昭和十五年になって仏法紹隆寺移動したことがわかる。⑥⑦によれば、慶応四年九月に如法院旧蔵の不動明王画像が富士見町乙事の法隆寺に移り、明治九年に法隆寺から岡谷市昌福寺に移動したことが判明する。

とりわけ、新出史料①は、慶応四年当時から廃仏毀釈の実態を談林所納所が記録した在地側の記録で詳細である。⁽¹⁸⁾それによると、概要はつぎのようにある。

慶応四・八・晦、仏法寺が両社本地堂、五重塔、三重塔、鐘樓、本堂秘仏を真言一派への下置くように申請。九・一、仏法寺が、上社六か寺・下社三か寺を仏法寺十四か寺と同様に取り扱うよう高島御役所に申請。九・一九、温泉寺より鉄塔・五重塔・普賢堂頂戴の願書、照光寺より千手堂・三重塔・鐘樓・仁王門頂戴の願書が出される。九・二〇、神宮寺村名主らが普賢堂境内の替地と普賢堂・五重塔・鐘樓・仁王門金銅籠二本頂戴の願書を提出。九・二五、京都表より明治改元の書状。一〇・三、仏法寺が、上社取除堂塔を残らず神宮寺村武井城に転地再建し支配所の下に置くようにとの願書を御用人高山彦右衛門殿へ差出。十一月当社堂塔一派配当入札高札覚。明治二・二・一二、月番千野新左衛門殿よ

り明日登城するよう仏法寺に書状。二・一三、両社堂塔配分について、神祇官より一旦取除いた堂塔ゆえ不興趣の仰が出て神宮寺武井城跡への転地再建案が拒否されたことがわかる。

したがって、この新史料は、六月鑑察使帰京以後から翌明治二年二月までの諏訪地方の村落内部の動向を村の側で記録した在地史料であることが判明する。ここから新史実として判明することは、つぎのとおりである。

(1) 廃仏毀釈について村方が非協力のため、仏法寺からは上下社取除き堂塔を払い下げるよう要請が高嶋藩に出され、神宮寺村からは武井城跡に神宮寺を転地再建の申請書が出され、高嶋藩から神祇官に伺書が出されていた。神仏分離を暴力的破壊の形態ではなく、移転再建策という具体的献策によって実施しようとする改善案が民間から提案され、藩当局を通じて神祇官にまで上申されていた。

(2) 神祇官は移転再建策の実行を否定し、神宮寺の仏教的遺物はすべて流転・散逸することになった。明治政府内部における神祇官の位置や権限がいかなるものであったのか、解明が必要になる。

こうしてみれば、今なお廃仏毀釈・神仏分離の歴史経過については不明な点が多く、在地における関係史料の博搜が必要であり、地域近代史研究の課題といわなければならない。

2. 上下社神宮寺旧蔵資料の再検討

上記の史料から、諏訪上下社神宮寺の文化財や資料は、慶応四年六月から九月をへて流出し、明治二年に月に武井城跡への転地移転策が神祇官によって拒否されてから、流失・散逸が激しくなり、昭和年代にも移転していたことがわかる。

〔神宮寺資料の再検討〕

一九九五年から九七年までの調査で再確認してみると、一部とはいえこれまでの通説と異なる事象が判明することが多かった。主要なものを

一覧表にすれば以下のとおりである。

表2

資料名	所蔵者
①上社普賢堂本尊 普賢菩薩座像(文禄二)	諏訪仏法寺現蔵
②如法院本尊 普賢菩薩座像(鎌倉時代・県宝)	大町盛蓮寺から諏訪仏法寺現蔵
③釈迦堂釈迦三尊像(胎内銘永仁、正応)	法華寺から平成火事で焼失
④釈迦如来像(文明十七年銘)	富士見町乙事法隆寺現蔵
⑤紺紙金泥法華経(鎌倉・天正十二年)	大町盛蓮寺から諏訪仏法寺現蔵
⑥五重塔相輪露盤残欠(延慶元銘)	松本松林氏から諏訪教育会現蔵
⑦五重塔本尊 五智如来像	万福寺無住になり諏訪市博物館
⑧鐘突堂梵鐘(永仁五年銘)	松本松坂屋に売却、不明
⑨下社神宮寺十六善神画像(室町・天正八年補修)	岡谷市横川区真秀寺現蔵
⑩同金剛界大日如来座像(明応銘)	同
⑪同胎蔵界大日如来座像(明応銘)	岡谷市照光寺現蔵
⑫同三精寺阿弥陀如来像(鎌倉時代・県宝)	岡谷市平福寺現蔵
⑬同観照寺日光・月光菩薩像	同
⑭春宮護摩堂本尊不動明王像	同
⑮不空索絹観音像(天文十三年銘)	茅野市昌林寺現蔵
⑯上社神宮寺普賢菩薩再興像(天正十六年銘)	同
⑰上社神宮寺舍利厨子	喬木村淵静寺現蔵
⑱如法院文書(無年号武田家朱印状)	滝沢氏から県立歴史館現蔵
⑲鎮守読経作法(康正二年書写)	諏訪教育会現蔵
⑳性霊集(天文三年写)	同
㉑護摩口決抄并神供口決(弘長二・慶安二年写)	同
㉒百法問答抄八冊(弘治元・永禄三年写)	同
㉓天疫神四十八通切紙并捻符大事(元禄十五年)	同
㉔十八道口決(弘長元・寛政元・享保三)	同

このうち、⑱古文書は如法院の子孫滝沢家から流失して市場に出た文書であり、『信濃史料』も武田勝頼の出したもので年次未詳としているものである(⑮146)。内容は神前と諏訪上坊普請と上坊庫裏・薬師堂近辺并優婆屋敷の造立と高島城破損の再興を郡中之人足で行うように春芳軒宗富・河西虎満・平原下野守・渡辺・篠原らに申付けたものである。

これまでの通説では、武田信玄は永禄三年(一五六〇)に諏訪社造営

の催促を行い永禄八・九年に諏訪社祭礼再興をおこなって、信濃一国に一律に武田氏の命令を及ぼそうという。諏訪社再興を通じて武田氏の信濃支配を深化・浸透したとする見解が通説になっている⁽¹⁹⁾。特に、商業活動で相当の財力をもった諏訪春芳が勝頼の家督を継ぐにいたって御蔵前衆として武田氏の財政に関与したものとされ、勝頼時代の諏訪神社との結合が強いものと想定されている⁽²⁰⁾。

では、笹本説でも特定されていない諏訪上社神宮寺上坊(如法院)造営事業はいつの時期に比定すべきなのであろうか。この点について、勝頼は天正二年(一五七四)八月から春芳軒宗富を本願として下社千手堂の上棟を行っていた(信史14-64)。天正三年四月廿一日千手堂造立供養の曼荼羅供を行い(信史14-90)、その奉行人が、河西但馬守虎満・渡辺筑前守盛忠・平原下野守虎吉・辰野善九郎であったことがわかる。天正五年(一五七七)三月三日には下社神宮寺宝塔を造立(信史14-192)し、天正八年二月十一日、勝頼は下社三精寺の規式を定め(同14-489)、天正九年(一五八二)二月十四日下社神宮寺井坊(宝珠院)に対して、下社千手堂の油断なき造営を命じ「造営之費用」を毎年一度勘定すべきことを命じている(同15-7)。こうしてみると、下社神宮寺の千手堂再興は天正二年(一五七四)から九年(一五八一)にかけて継続しており、それでも完了せずに下社神宮寺井坊による長期の造営事業継続が命じられていたことが窺われる。もっとも、この下社神宮寺再興の史料は、慶応四年(一八六八)から明治二年(一八六九)までの廃仏毀釈での神宮寺取り壊しでの棟札銘写(諏訪史料叢書)によるものである。その史料批判が必要不可欠であるが、下社神宮寺の再興と井坊による造営事業継続命令の奉行人がほとんど上社神宮寺上坊再建を命じた⑰古文書の宛名と一致していることからみれば、上社神宮寺上坊普請も下社神宮寺(千手堂)造営と並行して行われていたものとみるべきであろう。そうなれば、上社神宮寺の神前・上坊普請も天正二年から九年までの時

期に実施されたことになり、諏訪上下社神宮寺再興事業は武田勝頼の財政逼迫に拍車をかけ、天正十年（一五八二）三月武田氏滅亡の財政的要因となったものといえよう。天正六年（一五七八）諏訪社造営事業が、実際には諏訪神社の自力救済力による造営費徴収システムを基本としており、在地の村々が造営費を未納にしたときに武田氏が造営費催促の朱印状を発給して催促する体制にあったことは拙論で指摘した。⁽²¹⁾ 武田氏の権力は村落内部にまで浸透していなかったというのが私見である。

「中世神事作法と神宮寺聖教類の性格」

諏訪神社関係史料を調査して中世の諏訪社神宮の儀礼作法を記したものが、ほとんどみられない。そうした中であって、神宮寺聖教類の中に⁽²²⁾「鎮守読経作法」がある。奥書につきのようにある。

「康正二年十月十三日書了、大阿闍梨報恩院隆濟僧正、御本云於醍醐寺校合了 尊如」

『国書総目録』では高野山金剛三昧院所蔵の慶長十四年写本が最古のものとしている。諏訪上社神宮寺旧蔵の康正四年（一四五六）書写の「鎮守読経作法」は、醍醐寺報恩院隆濟本と校合した現存最古の写本となる。こうしたものが諏訪神社の社僧によって必要とされていたことを示している。いいかえれば、神前読経が必要になったとき、その儀式作法は醍醐寺の聖教を書写することによって対応していたのであり、中世諏訪神社の神道作法の全体像を復元しようとするとき、神宮寺旧蔵の中世聖教類の調査は重要な史料になりうるといえよう。

②護摩口決抄并神供口決も、奥書より弘長二年正月報恩院で頼瑜が伝授したものを、慶安二年八月に書写したものである。⁽²⁴⁾ 十八道口決も、奥書より弘長元年報恩院頼瑜本を寛政元・享保三に転写したものであるから、これらは三点セットで伝授されていたものと考えられる。『国書総目録』によると、京大本の十八道口決は、やはり護摩法口決と神供口決を付して文政九年の書写であったという。十八道口決は、江戸時代の

神道作法次第書でも「十八神道之行法」などとみえるものである。⁽²³⁾ 天疫神四十八通切紙并捻符大事は、元禄十五年七月書写で信州平出妙雲山高徳寺隠居堯亮法印よりの伝授とある。吉田宗源神道の「唯一神道行事次第」（続日本古典全集・現代思想社）には、「疫神祭大事」や「神道切紙」の次第書が含まれている。⁽²⁵⁾ こうしてみれば、織豊期く江戸初期に吉田兼俱によって体系化される宗源神道の次第書の骨格は、中世における神宮寺社僧が真言や天台などの密教的聖教類から学んでいたものと大差のないものであったといえよう。あらためて、中世における神道独自の儀式作法がどのようなものであったか、仏教の聖教類との類似性についても再検討することが今後の研究課題といえよう。

3. 諏訪上社神宮寺の織豊期再建説の提示

これまでの通説では、天正十年三月三日織田信忠により神殿・伽藍が焼失し、徳川家康が慶長十三年に四脚門を寄進し、元和三年に神殿を再建したが、諏訪上社の釈迦堂と神宮寺は被災を免れ、鎌倉時代のものが廃仏毀釈まで存続していたと理解されてきた（『諏訪市史』上巻）。

しかし、諏訪上社神宮寺については、信長乱入時に焼失したとする史料が、あらたに発見された。神宮寺関係仏像の⑯普賢菩薩菩薩騎象像の光背銘にはつぎのように記載されている。⁽²⁶⁾

「此尊末代迄 動事恐神罰 上諏方十六善神信長乱入炎上其以後普賢菩薩之木像令再興之願主神頼忠然者郡中安全殊別社中繁茂子孫昌泰為上求菩提、下化衆生也 別当神宮寺衆祐 天正十六年戊子八月十五日入仏之 時奉行守屋□□□」

これによれば、諏訪上社の十六善神や普賢菩薩像が信長乱入に際して炎上し、諏訪頼忠が天正十六年（一五八八）八月に普賢菩薩像を再興したことがわかる。上諏訪十六善神とは大般若経転読の本尊として釈迦三尊十六善神画像を鋪設するもので、諏訪上社神宮寺に伝来したものであったと考えられる。信長乱入で普賢菩薩像が炎上とされている

から、上社神宮寺の普賢堂が焼失していたことになる。それを天正十六年（一五八八）に諏訪頼忠が再興したのである。したがって、上社神宮寺普賢堂は鎌倉期のものが天正十年（一五八二）に焼失し再建されたものとなる。廃仏毀釈で取り壊されたものは天正十六年再建されたものであったことになる。以下、これを神宮寺普賢堂の織豊期再建説と呼ぶ。

これまでの通説では、上社神宮寺の五重塔・普賢堂は、鎌倉時代に知久敦幸が造立し、信玄・信長期も焼失することなく慶応四年の廃仏毀釈まで存続したもので、解体時の棟札銘写が諏訪史料叢書にとられ、その写や普賢堂指図・五重塔指図が高木村歴史民俗資料館に所蔵されていることからまちがいないとされてきた。私も、『長野県史通史編』（長野県史刊行会、一九八六）などでも旧来の通説によってきた。

しかし、上社神宮寺の本地仏は普賢菩薩像であり、普賢堂をはじめ諸堂には釈迦三尊像としての普賢菩薩像を含めれば、多くの普賢菩薩像が存在したにまちがいない。⑰によれば、天正十年に信長軍により普賢菩薩像が焼失したのであるから、神宮寺普賢堂なども焼失したとみるのが自然である。普賢堂から仏法紹隆寺に移転したとされてきた②木像普賢菩薩像は、神宮寺如法院の旧蔵のものであったことが判明した。普賢堂から仏法紹隆寺に移った①普賢菩薩像銘文にもつぎのようにみえる。⁽²⁵⁾

「奉造立上諏方 本地尊像一体 除難興福、擁護守護 如影如形

刹那不離 神宮寺時之住持権大僧都法印祐元 願主矢島長久一家繁

榮二世安楽□ 文禄貳白昭陽大荒落 十壱月吉日取次仙秀」。

これも上社神宮寺・普賢堂が天正十年信長軍の乱入で焼失し文禄二年に再興されたものにまちがいない。こうしてみれば、上社神宮寺や普賢堂が鎌倉期知久行性による築造のまま明治期まで伝来したとみるのは困難で焼失していたものと考えざるをえない。この普賢堂再建説は、拙著『中世寺院と民衆』（臨川書店二〇〇四 増補版二〇〇九）でも公表した。いいかえれば、こうした諏訪神宮寺の関係史料を再検討することによっ

て、諏訪上社・下社の歴史事実を掘り起こすことができるということとはまちがいない。

こうした神社史料から神宮寺など仏事関係史料が流失してしたことは全国の神社に共通することである。いいかえれば、近代における廃仏毀釈の過程で、前近代の神社史料群は大きな構造変化をとげたのであり、現存する神社史料群をその全体像とみてはならないことがわかる。しかも、今後の神社史料研究にとって、流失した神宮寺仏事など関係史料の再訪と再検討は必要不可欠であることを再確認して研究・調査が行われなければならない。廃仏毀釈の全体像の解明は、日本近代史研究においても不十分であり、神社史料の歴史的品格を考える上では避けて通れない重要課題といわなくてはならない。

Ⅲ 国家神道下での近代諏訪縁起の創出

1. 「阿蘇家略系図」をめぐる諸問題―国家神道下での関係史料の偽作・偽編
諏訪神社関係史料をめぐる論争史でかならず取り上げられるのが「異本阿蘇氏系図」と郡評論争である。これは、井上光貞によって古代国郡制の前に、評判が存在したという新説をめぐって活発な論争が展開された。その最中、田中卓が、阿蘇家には平安時代以来「阿蘇家略系図」という史料の存在を紹介し、それによって科野国造と阿蘇国造は武五百建命の子孫であり、金弓君が欽明天皇の磯城島金刺大宮に奉仕して金刺舍人直姓を受けたこと。その子麻背君（別名五百足君）が科野国造に復し、麻背君の子倉足は諏訪評督に就任し、もうひとりの子乙頼（一名神子、熊古）は八歳のとき御名方富命大神が化現して「われ体無し、汝をもつて体となす」として諏訪大神大祝となったこと。磐余池辺大宮朝二年（五八七）未三月、社壇を湖の南山麓に構え、諏訪大神并百八十神を祭ったことなどの史実をあきらかにした。⁽²⁶⁾この系図には、諏訪郡が生まれる以前に諏訪評督が存在したことになっており、郡評論争での新出史

料としても大変注目され大きな反響をえた。

この「阿蘇家略系図」は、関晃が取り上げ再評価し、長野県史編纂でも再検討され、⁽²⁷⁾諏訪市史編纂でも資料研究が不可欠になり、拙論を公表し検討した。⁽²⁸⁾拙論は系図の記載内容が他の史料と矛盾が少ないこと。科野国造金刺舎人直氏が欽明敏達朝に大和王権に出仕、用明朝に諏訪社の社壇ができ大祝が就任した説が史実ではないかとし、「系図そのものの検討が今後の課題」と記載した。

その後、伊藤麟太郎は明治十七年延川和彦が諏訪大祝家において「阿蘇氏系図」をみており、それは飯田武郷の偽撰であり、阿蘇家や知久家にあるものは中田憲信が飯田偽撰を送り付けたものと主張した。⁽²⁹⁾九州でも阿蘇神社研究の中で、村崎真智子が、近世後期に成立した「阿蘇家伝」七巻本には異本系の神名はなく、阿蘇家には近世後期まで異本阿蘇氏系図は存在しなかったこと。異本阿蘇氏系図は中田憲信が作成し阿蘇家に送り、阿蘇家ではそれを利用して「阿蘇家伝第八巻」を作り、異本系の系図が「阿蘇系図」としてのつていいること。異本阿蘇氏系図と神氏系図（明治十七年延川和彦が大祝家で発見）の作成者は同一人物（中田憲信）であり、神氏系図は飯田武郷が文案をつくり中田憲信が作成したものとした。⁽³⁰⁾明治から大正年間には、国家神道の下で国学者による史料の偽作が行われたことを指摘したのである。

長野県立歴史館企画展示『諏訪信仰の祭りと文化』（図録一九九八）にともなう資料調査では、故阿蘇惟孝氏宅に伝来したとして田中卓が紹介した阿蘇氏系図は、現在の当主阿蘇惟之氏宅には存在しないことが判明した。一九八八年には学芸員伝田伊史が阿蘇家を訪問して確認した。私も二度阿蘇家を訪問し、欄宜阿蘇治隆に再確認したが、現在異本阿蘇氏系図は阿蘇家には存在していないという。異本阿蘇氏系図はいまや田中卓の写真史料のみが唯一の存在である（図録掲載）。この史料は阿蘇家に古くから相伝されたものではなく、後代になって混入したものであつ

たといわざるをえない。田中卓がこの史料についての伝来論をまったく記録していないことも史料論に混乱をもたらした一因といえよう。熊本県立図書館所蔵上妻文書によれば、「中田憲信編阿蘇系図全」を昭和五年上妻博之が筆写している。こうした系図は偽撰というよりもまさに国学者の研究による編纂物としてみるべきなのかも知れない。村崎が「喬木村資料館蔵」の二本の「知久家系譜」があり、その一本が異本阿蘇氏系図とよく類似しているとし、信州に異本阿蘇氏系図と類似した系図が存在したと指摘している。

しかし、私の調査では喬木村歴史民俗資料館には、系図として「知久家系譜」（資料番号26―2 寛政十年十二月）、「知久家系譜」（同27―1 享和三年）、「知久家御系譜 全」（同41―57 年不詳）、「知久家系譜」（同41―76 年未詳）の四本ある。「先祖書」（同26―1 寛政三年）「知久系図」（41―65 年未詳）、「知久氏系図」（同41―93 年未詳）諏訪家系譜（同30―15 天保壬卯）、諏訪家系譜（同41―42 年未詳）、「修補諏訪氏系図 正・続」（同39―12 大正十、十二、十三刊本）がある。⁽³¹⁾私見では、どれが村崎のいう異本阿蘇氏系図と類似して系図なのか特定しえなかった。

いずれにせよ、異本阿蘇氏系図をめぐる史料論ひとつみても、幕末から近代国学者や神官の編纂物や書写類が多数混在しており、実際に社家や神社、宮司家に伝来したものと後代に混入したものとを識別した史料学的な文書管理学・文書伝来論が必要になっているといわざるをえない。とりわけ、神社における資料の分類法や系統的な整理法などは今後の検討課題であろう。

2. 近代国学者による近代的諏訪縁起の編纂活動

近代国学者の諏訪系図研究を調査してみると、飯田武郷の研究が最も早い。そこには、「科野国造ハ建甕富命ヲ娶リテ妻トナシ」とし、諏訪氏を科野国造と一体のものとする主張を展開している。⁽³²⁾飯田武郷は『日

本書記通釈』の著者として知られ、諏訪・貫前・浅間神社の宮司を歴任した近代神官であり、東京大学・國學院大學教授をつとめた人物である。

『諏訪史料叢書』系譜部類には、中田憲信「諏訪家譜」が取られている。そこには「磐余池辺双槻大宮の御宇丁未の年三月乙亥、大神の御衣ヲ著セシメ」と記述されている。これは「異本阿蘇氏系図」と全く同じ主張であり、「諏訪評督」の記載もある。

延川和彦著・飯田好太郎編『修補諏訪氏系図 正編』が一九二一年に刊行されている。それを見ると「飯田氏・・・加賀侯爵前田家所蔵神氏系図古写本を模写し明治十五年一月をもつて岩本尚賢（諏訪神社宮司）及び余両名に宛てて恵与せらる。」とか「飯田武郷所説」「中田憲信編纂二係ル諏訪家譜ヲ抜粹」「評督郡司皆同シ職責ナリ」などと記載されている。つまり、「異本阿蘇氏系図」の内容は飯田武郷「科野国造考」や中田憲信「諏訪家譜」及び両者を組み合わせた延川和彦著・飯田好太郎編『修補諏訪氏系図 正編』に合致するのである。「評」や「評督」の存在は、井上光貞が取り上げる以前からすでに国学者によって知られていたことがわかる。

ここに登場する延川和彦は、明治五年十月に新制神官が発足したとき、岩本尚賢とともに諏訪神社欄宜に任命されている。明治六年四月には、諏方神社権宮司赤司重春・欄宜岩本尚賢の連名で氏子札を発行（『諏訪市史下巻』五五八頁掲載写真）しており、近代神社の組織化を推進しようとしたことがわかる。このように延川和彦や飯田武郷らは、国学者であるとともに、いずれも新制神官に任命された近代国家神道の官僚である。彼らは、明治近代国家の発足にあたって、諏訪神社の近代的縁起を新しく編纂して明治民衆を近代的諏訪神社の下に組織化しようとしたものとみるべきであろう。

「阿蘇氏略系図」を偽撰・偽作とみることは、学問上の表現として誤りではない。しかし、近年の国文学分野における中世日本紀の研究から

みれば、中世神官層が中世の神社縁起を編纂して中世民衆の信仰を獲得しようとしたことと、同じことを近代神官として飯田武郷・岩本尚賢・延川和彦が行っていたとみることもできよう。

こうしてみれば、近世国学の知的水準の高さを継承した近代神官層が、近代的神社に即応した近代的神社縁起をどのように編纂しようとしていたのかという視点から、近代神道資料を再検討して見る必要がある。賀茂社史料としてよく使われる「賀茂注進雜記」も近世の編纂物で、賀茂社主岡本保可らが撰集したものであり、寺社奉行に提出されたものであった。それも近世国学による神社縁起・神社史の編纂事業であったとみることができる。⁽³³⁾ 神社史料には、近世国学者や近代神官など各時代の神官層による神社縁起創出の側面が存在していたとみるべきである。

終章 諏訪神社史料の特徴と他社との共通点

1. 諏訪神社史料群の特徴

以上の検討から諏訪神社関係史料の残り方はいくつかの特徴がみられる。第一の特徴は、諏訪神社本体が所蔵している史料はいずれも近世・近代にあつて集められたものであり、それよりもはるかに大量の文書群が諏訪大祝家や神長官・権祝・擬祝・副祝・欄宜太夫家の五官祝家など旧社家の文書として神社の外部に伝来していることが挙げられる。いいかえれば、本来の諏訪神社の文書群は、現在では諏訪神社とは直接関係のなくなった旧社家文書として個人所蔵になっているのである。

こうした特徴は、明治維新での廃仏毀釈と国家神道政策と戦後宗教法人政策の結果である。明治四年諏訪社は上下社合わせて一社とし国幣神社になるとともに、世襲神職の廃止により大祝・神長官・欄宜大夫・権祝・擬祝・副祝・奉行・政所・宝釵持以下二七〇人の社中が還俗した。

神職は県の任命制になり、禰宜2・権禰宜3・主典3が新神官となった。当初は祭事に際して旧社家も協力したが、国家神道の制度化がすすむにつれて、旧社家は神社から離脱させられた。昭和二十一年宗教法人令により神社本庁が設立され、昭和二十三年諏訪大社と改称した。現在、諏訪神社の神官は宮司・権宮司・禰宜・権禰宜・出仕の五官で、いずれも神社本庁の任命職員である（『諏訪市史下巻』諏訪市一九七六）。このため、世襲神職であった旧社家や社中はいまや諏訪大社とは無関係になり、社家文書は個人所蔵史料としてそれぞれ家の文書として伝来している。わずかに諏訪大祝家文書、権祝矢島家文書が諏訪市立博物館に寄託され、神長官守矢家文書が茅野市に寄託されて調査が進展しているにすぎない。それ以外の社家文書は、当主の代替わりで相続人の喪失・個人経営や移住により家の伝統や家職意識の喪失などに直面しているところが多い。一部の諏訪神社関係史料が、古書市場に流失しており、世代交代の中で伝来の由来が亡失され、保存状態は悪化の一途をたどっている。

第二の特徴は、諏訪神社関係史料群は、廃仏毀釈・神仏分離によって神宮寺文書はもとより、旧社家史料においても仏教関係史料が排除され、ほとんど所在すら不明なまま流出・散逸しているのが実情である。このため、中世・近世における神社年中行事や神事作法などの解明に寄与しうる史料群が、行方不明になっている。前近代の神道祭事の作法や、神道と仏事との区別の仕方、祭壇の荘厳作法、神楽・雅楽など音楽史料、建築・船大工・疫病・五穀豊穰・病氣退散などの祓作法や呪術作法などの解明は、未調査であり、新しい史料群の発掘なしには、不可能である。現在の諏訪神社関係史料にはこうした偏在性が著しい。

第三の特徴は、明治後期から昭和初期における神社神官は、新制神官に任命された近代国家神道の官僚であり、旧社家とは異なる神道観をもっていた。彼らは、近代国家のイデオロギーに即した諏訪神社の近代的縁起を新しく編纂して明治民衆を近代的諏訪神社の下に組織化しよ

うと努力した。それゆえ、前近代の神社史料群とは異質な史料を伝統的なものであるかのごとく粉飾したものもみられる。いいかえれば、神社史料は近代的縁起による粉飾・偽作・改変などの影響を受けていることに留意する必要がある。

2. 全国的な神社史料群の現状と共通点

前節でみた諏訪神社史料群の三つの特徴は、諏訪神社史料のみの特質ではなく、全国的な神社史料に共通する特徴ではないかと私は考えている。現在、旧神主や社家が、現任の神官となっているのは、阿蘇社の阿蘇家、宇佐社の到津家、大山積神社の三島家、出雲大社の千家など数えるほどしかない。いいかえれば、現在の神社の神官層と神社史料をもっている旧社家とは無関係になっているところが多い。以下、全国の神社史料の調査・研究の現状をみながら、可能な範囲で比較検討してみたい。

石清水八幡宮文書は、別当家の田中家と菊大路家に伝来したものが中心で、明治四十三年に田中家当主俊清氏が偶々八幡宮宮司であったことから、社外に伝る史料をふくめて編纂したことによって石清水八幡宮史ができたといわれる（『石清水八幡宮史』社務所 一九三九）。戦前において社家文書が流出する前にまとめて編纂・刊行された事例は、春日神社文書や鹿島神宮文書の刊行など例外的な事例といわなければならない。

八坂神社文書は、旧執行であった寶寿院建内家に伝来した文書で、廃

仏毀釈後流出したものが、昭和五年に神社の所有に帰したものである、⁽³⁴⁾それ以外のものは早稲田大学図書館や京都歴史資料館などに流出して

いる。⁽³⁵⁾北野神社文書も、室町期に成立していた院家の所蔵文書が中心であったが、廃仏毀釈以後市場に流出し、京都大学・筑波大学・東京大学史料編纂所などによって再購入され、その全貌はいまなお不明である。⁽³⁶⁾伊勢神宮文書についても、神宮文庫に所蔵される文書は、慶安元年（一六四八）外官司官修学の豊宮崎文庫と、貞享三年（一六八六）

宇治会合所の内宮文庫である林崎文庫とを基盤としており、明治四年（一八七二）内宮文庫と外宮神庫が神宮司庁になったのにもなつて、明治六年林崎文庫が献納され、明治三十九年に一括管理のため神宮文庫が設立されたのである。したがって、その内容は、祀官村松家、荒木田家、東寺文書、大湊太田家文書、御巫清直の収集文書やさらに収集された三条家文書（愚昧記）、山中文書など直接伊勢神宮とは無関係な諸家文書が含まれている。⁽³⁷⁾ 熱田神宮の場合も、寶庫文書は大宮司千秋家・権宮司祝詞師田島家・惣検校馬場家・大内人大喜家・長岡家・松岡家など社家や旧神宮寺に旧蔵されていたものが、廃仏毀釈の後神社に寄納され、巷間に出て篤志家によって神社に奉納されたものである。⁽³⁸⁾

千葉県の香取神社文書は、旧大禰宜家文書と旧大宮司家文書の一部が神社の所蔵となったもので、その大半は録司代・田所・案主・分飯司・物忌・源太祝・要害・西光司などの社家史料と新福寺文書として個人所蔵のままであり、現在の香取神社との直接的な関係はなくなっている。⁽³⁹⁾

上賀茂神社文書について、平成十五年京都府から古文書整理事業が行われ、『賀茂別雷神社文書目録』（京都府教育委員会 二〇〇三）が刊行され、あわせて「歴史文化講座」が開催された。⁽⁴⁰⁾ それらは氏人惣中文書が中心で、ほかに社家文書としては鳥居大路家、岩佐家、梅辻家、馬場家、座田家などがあり、関係機関に散在しているものもある。

こうしてみれば、多くの神社史料は神社や現任の神官層の保管下にあるものはむしろ限定された文書群にすぎず、そのほとんどが社家文書として個人所蔵に帰しており散逸の危機に直面し、史料群の全体像はなお不明の状態のものが多くといわなければならない。社家文書の群としての全体的構造を理解することは、神社史料に対する史料批判を厳密にするうえで必要不可欠な作業である。なお、その際に個別神社における廃仏毀釈の実態解明や旧聖教類の所在にまで言及する研究はほとんどみあたらない。神社史料を検討する際に、廃仏毀釈による神社史料構造の改

変という問題は避けて通れないものとして研究者が自覚的・意識的に留意すべき検討課題としなければならない。

また、近世・近代の神官層による神道書や縁起の編纂・改変という諸問題についてはほとんど論じられていない。⁽⁴¹⁾ しかし、神道史というものが「近代日本的偏見」を受けていることを強調したのは黒田俊雄の指摘である。⁽⁴²⁾ 国家神道の下で神道書や神社史料がどのようなイデオロギー的変容を遂げたのかをあらかにするには、神社史料研究の分野としなければならないと考える。飯田武郷・岩本尚賢・延川和彦をはじめ平田国学の神官層、さらには宮地直一らが神道書や神社史料にどのような影響を与えたかは今後の研究課題である。

こうした神社史料ももつ諸問題をトータルとして論じた研究はきわめて少ない。これまでの研究では、神社史料を数多く採訪した村田正志が、神社から離脱してゆく古文書が多く、旧社家の者がその神社に奉仕することが事実上不可能になっているという問題点を指摘しているにすぎない。⁽⁴³⁾ 社家文書の特質について論じたものは見当たらず、わずかに西垣晴治が中世神社・神道関係文書の所在情報をまとめているのみである。⁽⁴⁴⁾ 神社文書の史料批判を徹底し、実証主義的な神社史料研究を構築するためにも、社家文書の特質についての資料学的研究が必要になる。

むすびに

二十世紀末期に全国で実施された自治体史編纂事業によって、中世史料の武家文書や地方寺院と含む寺院文書の発掘が膨大な量に及んだ。それが、二十一世紀の日本歴史究明の資料的基盤を確立することになったことはあきらかである。私も一九八〇年に長野県史通史編纂委員として地方での史料調査に従事しはじめてから、武家や寺院史料に比較して、神社史料の調査はこのほか困難を伴うことを経験してきた。神像や神

宝の調査は閲覧そのものが難しく、蔵物の調査は神主の一存ではいかないとして総代会の審議が必要となることが一般的であった。他方で、農山村の過疎問題の中で、村の鎮守や小堂などが合祀され、朽ちるにまかせた姿をみることも少なくなかった。しかも、神社史料が廃仏毀釈・神仏分離で大きく改編され、さらに近代神官制度によって旧社家が神社との関係を断たれて個人の家蔵史料として伝世され、世代交代の中で散逸や売却の危機にあることを数多く体験した。史料は群として相伝されており、そこに独自の歴史の意味があり、その解明は史料批判学の基礎作業として必要不可欠になっている。にもかかわらず、そうした由緒や相伝の経緯が記録されぬまま、一紙物や軸物として古書店界などに流通する姿をみるにつけて、これは歴史学・書誌学・史料批判学の危機でもあると考えるようになった。

とくに、井上寛司の下に結集した諸国一宮制研究会による諸国一宮の現地調査や『中世諸国一宮制の基礎的研究』（岩田書院 二〇〇〇）などに参加する中で、諏訪神社史料が直面している諸問題は、神社史料に共通しているのではないかと考えるようになった。國學院大學のCOEプロジェクトの「神道・日本文化の形成と発展に関する調査研究」では、千々和到・岡田莊司にお世話になりながら、シンポジウムや「御記文について―神社史料の諸問題」を報告する機会を与えられた。歴博共同研究「神社史料の多面性に関する資料論的研究」では、史料群としての史料批判学が必要不可欠であることを学ぶことができた。そうした中で、神社史料が置かれている現状の危機的状態を自覚してもらう一助になり、すこしでも保存にむけての具体的な前進が図られ、神社史料群の特殊性についての問題意識が高まることを期待して、本報告を執筆したものである。中世の諏訪関係史料については、紙数の関係から別に発表することにした。⁴⁴⁾

註

- (1) 岡田莊司『平安時代の国家と祭祀』（続群書類完成会一九九四）。藤本元啓『中世熱田社の構造と展開』（続群書類完成会 二〇〇三）
- (2) 一宮研究会編『中世一宮制の歴史的展開』（上・下巻、岩田書院 二〇〇四）、井上寛司『日本の神社と「神道」』（校倉書房 二〇〇六）
- (3) 宮地正人編『平田国学の再検討』（『国立歴史民俗博物館研究報告』一二二・一二八 二〇〇五・〇六）
- (4) 坂本亮太『中世村落祭祀における寺社の位置』（『国史学』一八六、二〇〇五）、菊米一志『中世前期における地域社会と宗教秩序』（二〇〇六年歴史学研究会大会報告 二〇〇七）。拙著『中世寺院と民衆』（臨川書店 二〇〇四 増補版二〇〇九）。
- (5) 以下、典拠史料の提示は、『信濃史料』13巻302頁の場合は「13302」と表示して注を省略する。諏訪神社の史料調査では、松本昌親・平林成元歴代の宮司をはじめ榎宜の原弘昌・竹埜正氏らのご協力をいただくことができた。記して感謝の意とする。
- (6) 拙論「中世の印章と出納文書」（有光友学編『戦国期印章・印判状の研究』岩田書院 二〇〇六）。大祝家・権祝家の文書は、諏訪市誌編纂室から諏訪市立博物館の寄託になり、この間の史料調査では、宮坂光昭・小林純子・高見俊樹諸氏のご協力・ご教示に預かった。
- (7) 伊藤富雄『伊藤富雄著作集』（全六巻 甲陽書房ほか 一九七八―八七）。
- (8) 『信濃史料』にとられた主要な史料は、長享二年春秋之宮造宮之次第・当社神幸記（同・天正二年）天文二年信濃国一宮諏訪本社上宮御鎮座秘伝記（12―61）・年未詳信玄書状（13―574）、天正六年二月下諏訪春秋両宮御造宮帳・天正六年二月武田勝頼造宮手形・天正七年下宮春宮造宮帳・天正七年二月下諏訪造宮帳・天正七年上諏訪大宮同前宮造宮帳・両社御造宮領并御神領等帳・諏訪大明神絵詞（錯簡あり・権祝綱政本書写）・永禄九年武田信玄朱印状・永禄九年小山田信茂書状（13―36）などである。諏訪忠弘所蔵のものでは、永禄十一年武田信玄朱印状（13―202）・永禄十二年武田信玄判物（13―335）・元亀二年武田信玄朱印状（13―430）天正四年武田勝頼判物案（14―137）など戦国期のものが多い。
- (9) 目録作製に参加した細田貴助『県宝守矢文書を読む』（正・Ⅱ ほぼずき書店 二〇〇三／二〇〇六）が刊行されている。神長官守矢家文書の調査では、守矢早苗氏・茅野市立総合博物館にご協力いただいた。
- (10) 戦後の一九七〇年代までの諏訪神社研究は、諏訪信仰を特集した『神道史研究』（23―5・6 一九七五）の鎌田純一「中世に於ける諏訪氏の活躍」、高階成章「諏

- 訪神社の研究」、真弓常忠「諏訪御柱に就いての所見」などに典型的に見られる。
- (11) 『信濃史料』に採録された守矢家文書のうち、古文書は精選されしかも「検討の余地あり」の注記が多い。主要なものは、將軍頼嗣下文・北条重時奉書・元応元年関東下知状・嘉暦四年幕府下知状案(結番帳)・至徳三年御射山頭役差定・文明十九年満実書状案・天文六年三条西公条書状(11-123)・天文八年古河公方足利晴氏家臣築田高助書状(11-142)・天文十一年諏訪頼重書状(11-178)・天文十五年千野山城入道宗光書状(11-327)・天文十七年口宣案(11-367)・天文十八年吉守矢頼真書状案(11-435)・天文二十二年後奈良天皇女房奉書案(12-582)・天文二十二年般舟院友空書状案・同神長官頼真書状案(12-592)・永禄九年玉かきの日記(13)・永禄九年武田信玄安堵状(13-43)・永禄十年武田信玄寄進状(13-183)・永禄十二年正親町天皇綸旨(13-323)・年未詳信玄書状(13-574)など限定されている。記録・典籍類は、諏訪十郷日記・諏訪御符札之古書・大祝職位次日記・年内神事次第旧記・上社物忌令・暦応三年守矢真実手記・守矢満実書留・諏訪大明神神秘本事(満実書写)・諏訪御符札之古書・大祝職位次日記・守矢頼真書留・神使御頭足之書・諏訪大明神絵詞・年内神事次第旧記(12-617)などきわめて多い。『鎌倉遺文』は守矢家文書の鎌倉期のものはほとんど採録しているが、書誌学的検討はほとんどなされておらず、今後の研究課題である。守矢家文書の史料批判の必要性については、拙論「書評と紹介・県宝守矢文書を読む」(『日本歴史』六七八、二〇〇四) 参照。
- (12) 矢嶋家文書的主要な史料は、天正六年二月武田勝頼造営手形・天文十二年板垣信方安堵状(11-205)・天文二十二年禁中修理料百貫文送状案(12-582)・永禄九年以上諏訪造営一柱請取状案(13-8)・永禄十年伊那廻御神役武田信玄置文案(13-62)・天正元年山家頼広書状(13-552)・天正元年武田信玄書状案(13-578)・年未詳信玄書状(13-574)・天正二年武田勝頼朱印状案(14-31)・天正二年武田勝頼朱印状案(14-75)・天正四年大和善親書状(14-147)・天正十年知久頼純書状などである。記録類では、嘉暦四年諏訪社御頭結番帳(「神長職権祝矢鳥家所持」・諏訪大明神画詞(錯簡なし・権祝綱政本書写) などである。
- (13) 諏訪大明神絵詞の権祝家本については、二〇〇二年八月三日一宮研究会夏季合宿(松代荘)で口頭報告「諏訪大明神絵詞の成立前史」を行った。
- (14) 『信濃史料叢書第三卷』「諏訪大明神絵詞・解題」(信濃史料刊行会一九七二)。金井典美「諏訪大明神絵詞の写本と系統」(『諏訪信仰史』名著出版一九八二)。
- (15) 権祝矢鳥家所蔵文書「諏方上宮権祝系図」(諏訪市立博物館寄託史料)。史料調査では、小林純子・亀割均両氏のご教示に預かった。なお、東京国立博物館所蔵の諏訪大明神絵詞梵写本の写真本については、丸山猶計氏のご協力を得た。
- (16) 鷲尾順敬「信濃諏訪神社神仏分離事件調査報告」(明治維新神仏分離史料)
- (17) 今井真樹「諏訪上下両社付属寺院遺跡」(昭和十年史蹟名勝天然記念物調査報告「長野県一九三五」)。今井は、鷲尾の調査報告にはかなり批判的であったことが窺われる。なお、今井広亀「諏訪の仏像をたずねて1・2・3」(『オール諏訪』3・4・5号 一九八一)、細野正夫「上社の廃仏毀釈1・2」(『オール諏訪』4・5号 一九八一)、今井広亀・細川正夫「中洲村史」(一九八五) 参照。
- (18) 慶応四年「両社仏閣社僧寺院御廃一流諸般記」諏訪市桑原・仏法招隆寺所蔵。史料調査では、仏法招隆寺住職岩崎有昶氏のご教示に預かった。諏訪上社神宮寺関係史料群の成果は、長野県立歴史館一九九八年度秋季企画展示図録「諏訪信仰の祭りと文化」で公開された。
- (19) 笹本正治「戦国大名武田氏の信濃支配」(名著出版 一九九〇、二一九頁)
- (20) 笹本正治「戦国大名武田氏の研究」(思文閣出版 一九九三、三二八頁)
- (21) 拙論「中世の印章と出納文書」前掲註(6)。
- (22) 康正二年十月一日「鎮守説経作法」(写本) 諏訪市・諏訪教育会所蔵。
- (23) 『神道大系 論説編九卜部神道』(下巻 校注・解題 岡田莊司 一九九二)
- (24) 天正十六年上社神宮寺普賢菩薩像・茅野市昌林寺所蔵。一九九七年十二月六日からの調査・写真撮影・展示等では信徒総代原田聖紀氏に総代会での許可をいただくなど大変なご協力をいただいた。
- (25) 文禄二年諏訪上社普賢堂本尊 普賢菩薩座像銘文・諏訪市桑原 諏訪仏法招隆寺所蔵。
- (26) 田中卓「古代阿蘇氏の一考察」(「高千穂・阿蘇」一九六〇)
- (27) 関晃「科野国造の氏姓と氏族の展開」(黒坂周平編「信濃の歴史と文化の研究」一九九〇)。
- (28) 平田耿二「日本古代氏族伝承の成立について」(『上智史学』三五、一九九〇)、井原今朝男「阿蘇氏系図の諸問題」(『諏訪市史研究紀要』三、一九九一)。
- (29) 伊藤麟太郎「所謂阿蘇氏系図について」(『信濃』四六・八、一九九五)
- (30) 村崎真智子「異本阿蘇氏系図試論」(劉茂源編「ヒト・モノ・コトバの人類学」慶友社 一九九六)。
- (31) 喬木村歴史民俗資料館所蔵の知久・諏訪氏関係史料の調査では、館長黒川良一氏のご教示に預かった。
- (32) 飯田武郷「諏訪神家并科野国造考」(『大八州学会雑誌』二九・一八八)。飯田武郷については、坂本辰之助著「維新の列士・国学の泰斗飯田武郷翁伝」(明文社 一九三四) 参照。
- (33) 菊田龍太郎「水戸藩と神道書編纂について」(『神道古典研究所紀要』七、二〇〇一)は、藩権力の神社行政と神道書編纂との関係を論じており、こうした視点から近世神道書の性格を総体として相対化して論じる必要がある。
- (34) 宮地直一「八坂神社の古文書について」(『八坂神社文書下巻』社務所一九四〇)

- (35) 野地秀俊「新出祇園社関係史料の紹介と翻刻」(『京都市歴史資料館紀要』二〇、二〇〇五)
- (36) 山本隆志「北野神社松梅院とその文書」(『筑波大学付属図書館特別展「学問の神」をさえた人びと」二〇〇二)、山田雄二「北野天満宮旧蔵文書・古記録の目録作成および研究」(平成十六、十八年度科学研究費補助金研究成果報告書二〇〇七)が、北野天満宮旧蔵の全体像を論じた最新の研究成果である。
- (37) 小島鉦作「神宮文書について」(『著作集2伊勢神宮史の研究』吉川弘文館一九八五)
- (38) 小島鉦作「解説寶庫文書・後記」(『熱田神宮文書寶庫文書』神宮宮庁一九七八)、高木昭作「解説田島家文書 馬場家文書」(『熱田神宮文書』神宮宮庁一九九七)。
- (39) 鈴木哲雄「香取文書の概要と史料の構成」(『千葉県史研究』四、一九九六)、『千葉県史編さん資料 香取文書総目録』(一九九九) 参照
- (40) 「上賀茂のもり・やしろ・まつり」(思文閣出版 二〇〇六)。なお、嵯峨井健「下鴨神社史料の所在と現状」、五島邦治「上賀茂神社の氏人組織と文書」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』5、二〇〇〇) 参照。
- (41) 近年、岡田荘司氏により史料批判に耐えうる吉田家の系譜があきらかにされ(岡田荘司「兼俱宣賢日本書紀神代卷抄」『吉田叢書第五編』解題、続群書類従完成会 一九八四)、奥書類から諸本検討が可能になった。大塚統子「二宮記の諸系統」(二宮研究会編『中世一宮制の歴史的展開』下、岩田書院 二〇〇四)は、吉田家による中世後期の「諸国一宮神名帳」が、近世・近代の写本や改編により多様な神道書をつくりだしたことをあきらかにしている。今後、神道書についてもこうした史料批判学が深化することが望まれる。
- (42) 黒田俊雄「神道史研究の背景」(『歴史科学』八〇、一九七九)
- (43) 村田正志「神社関係の古文書覚書」(『村田正志著作集』第六卷思文閣出版一九八五)
- (43) 西垣晴治「神道文書」(『日本古文書学講座第5巻』雄山閣出版 一九八〇)
- (44) 井原今朝男「鎌倉期の諏訪神社関係史料にみる神道と仏道―中世御記文の時代的特質について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一三九、二〇〇八)

(国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系)

(二〇〇八年六月一七日受理、二〇〇八年七月二九日審査終了)

Problems with Historical Shrine Documents Focusing on Suwa Shrine

IHARA Kesao

Recently, there has been a flurry of research on the history of shrines, but little attention has been paid to the historical characteristics and problem areas of the many historical shrine documents used in such studies. In light of this situation, the author has made an examination of the materials included in historical shrine documents.

First, documents kept at existing shrines or by current shrine officials are at best limited. Rather, as a great many more relevant documents are held privately by individuals as documents that belong to shrine families there is a danger that they will be scattered or lost. We must conclude, therefore, that there is no clear overall picture of these historical documents.

Second, documents belonging to individual shrines were altered substantially as a result of the Meiji abolition of Buddhism, which greatly altered the composition of historical documents. Consequently, we are faced with the problem that the view of a shrine's history presented by surviving documents varies from historical reality. Once again, it is important that investigations are made into clarifying the actual situation concerning the abolition of Buddhism and the location of former Buddhist documents.

Third, surviving historical shrine documents are problematic for a variety of reasons, including the editing and the changes made to Shinto documents by shrine officials during the Early Modern and Modern periods. However, since clarifying this situation is a task for future studies, it has not been covered here as a problem affecting the study of historical documents. It has been pointed out that Early Modern kokugaku and modern state Shinto created a "modern Japanese bias" in the history of Shinto. Thus, the kinds of ideological changes that were made to Shinto and shrine documents under state Shinto during the Early Modern and Modern periods must be studied as a separate field of research on historical shrine documents. What is needed is multi-faceted research into documents that discusses in full the various problems and characteristics of these historical shrine documents.